



発行所 千107-0052 東京都港区赤坂7丁目5番38号 公益社団法人 日本PTA全国協議会 発行人 尾上浩一 電話 03(5545)7151 FAX 03(5545)7152 ホームページアドレス http://www.nippon-pta.or.jp/

綱領

本会は、教育を本旨とし、特定の政党や宗教に偏ることなく、小学校及び中学校におけるPTA活動を通して、我が国における社会教育及び家庭教育の充実に努めるとともに、家庭、学校、地域の連携を深め、子どもたちの健全育成と福祉の増進を図り、もって社会の発展に寄与する。

主な内容

1面 〇年次表彰式
2面 〇年次表彰式 〇優良PTA紹介
3面 〇全国研究大会 長崎大会総括
4面 〇日本PTA ブロック研究大会
5面 〇日本PTA ブロック研究大会
6面 〇刊行予定書籍 〇国内研修事業 〇優秀広報紙集
7面 〇推薦映画紹介 〇県P自慢 〇学校の窓から
8面 〇心のきずな 61教育支援基金 〇そよ風通信

平成26年度年次表彰式 家庭・学校・地域の架け橋として

～未来を担う子どもたちのために～



式辞 公益社団法人日本PTA全国協議会 会長 尾上浩一

尾上会長式辞 11月19日(水)東京都千代田区のホテルニューオータニにて、平成26年度PTA年次表彰式が文部科学省事務次官山中伸一様をはじめ多数のご来賓をお迎えし盛大に開催された。今年度受賞したのは、文部科学大臣表彰129団体、日本PTA会長表彰121団体、個人表彰221人。そして感謝状が4人に贈られた。また第36回全国小・中学校PTA広報紙コンクールの表彰式も同時に行われた。

平成26年度PTA年次表彰式及び第36回全国小・中学校PTA広報紙コンクールの表彰式を挙げるにあたり、文部科学省事務次官 山中伸一様をはじめとする御来賓の皆様方にご臨席を賜りましたことに、謹んで御礼を申し上げます。昭和23年6月に全国PTAが創立され、昭和32年には「日本PTA全国協議会」と改称され、今日に至るまで、その誇りある名称と活動が引き継がれてまいりました。あわせて、日本のPTAという組織の存在意義を明確にし、支え、見守ってこられた多くの先達・関係諸氏に敬意と感謝を申し上げる次第であります。本式典において、受賞されます優良PTA団体及び功勞者の方々は、日ごろの優れたPTA活動が高く評価され、それを顕彰するものであり、心から御祝いを申し上げますとともに、その功績を称え喜びを分かち合いたいと存じます。PTAは、保護者と教職員が主となって家庭と学校、学

校と地域、地域と家庭をつなぐ子どもを中心に置いた地域教育や家庭教育を活性化させる役割を担っています。その活性化をさせる手段・方法に、広報紙が大切な役割を果たしていることが、様々な広報紙から感じ取ることが出来ます。その時々々の活動内容や学校での出来事や地域へ



祝辞 文部科学省事務次官 山中伸一氏

文部科学大臣祝辞 校と地域、地域と家庭をつなぐ子どもを中心に置いた地域教育や家庭教育を活性化させる役割を担っています。その活性化をさせる手段・方法に、広報紙が大切な役割を果たしていることが、様々な広報紙から感じ取ることが出来ます。その時々々の活動内容や学校での出来事や地域への思いなど記録としての役割。時事的な問題提起やそれを解決するための提案といった啓発や教育に関する役割等、情報源でもあり、教育源でもあり、地域史でもあります。これからも広報紙の作成を通じて、人とのつながりや地域とのつながりが、より一層深まることをご期待する次第であります。

当日公務により、文部科学省事務次官 山中伸一様により代読されました。本日、平成二十六年年度日本PTA全国協議会年次表彰式がこのように盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。PTAの皆様におかれは、日頃からPTA活動を通じて、学校・家庭・地域の懸け橋として、子供たちの健全育成と学校教育の支援に御尽力を頂いておりますこと、この場をお借りして感謝申し上げます。特に、本日栄えある賞を受

賞された皆様におかれは、永年にわたり、他の模範となる活動に努められ、PTA活動の振興に多大な貢献をされました。これまでの御功績に対し、深く敬意を表します。日本の将来を担う子供たちは国の一番の宝です。教育は国の根幹を形づくる最重要政策です。教育再生のための施策を実行に移し、世界トップレベルの学力と規範意識を備えた人材を育成してまいります。文部科学省では、子供たちが主体的・協働的に学ぶ課題解決型授業への転換や、専門的配置充実による「チーム学校」の推進などを盛り込んだ、十



文部科学省大臣官房審議官 徳田正一氏

か年の新たな教職員定数改善計画案を策定しました。これが実現すれば、十四年ぶりの法改正を伴う定数改善計画となります。財政当局からは、小学校一年生の四十人学級化や教員給与の縮減など到底容認できない

いじめは、絶対に許されません。いじめ防止基本方針を基に、総合的な対策の実施を進めます。体罰についても、禁止の徹底を図ってまいります。心と体の調和の取れた人間の新たな枠組みによる教科書化に取り組みとともに、文部科学省が作成し、今年度から全ての小・中学生に配布している副教材「私たちの道徳」

の活用を促してまいります。「私たちの道徳」は、学校のみならず、家庭や地域においても広く活用していただきたいと考えて作成したものです。家庭に持ち帰って、家族と一緒に話し合つなど、家庭や地域においても有効に活用していただきますようお願いいたします。学制改革については、小中一貫教育の制度化をはじめ、発達に応じた教育の充実、様々な挑戦を可能とする制度の柔軟化などに取り組んでまいります。今年の通常国会では、戦後五十八年ぶりの改革となる教育委員会制度改革のための法律が成立しましたが、PTAの皆様方におかれは、ぜひこの新たな教育委員会に教育委員として御参画いただき、教育行政に保護者の声を積極的に反映していただくことを期待しています。

また、御来賓の皆様方には、日本のPTAのより一層の充実のために、更なるご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。式辞とさせていただきます。また、地域の企業等の協力を得て、今年度は全国で約一万二千校で行われている土曜日の教育活動が、より多くの学校で展開されるよう取り組んでまいります。日本PTA全国協議会にも、土曜学習応援団として御参画いただいておりますが、社会全体で健全育成を図っていくため、今後とも、積極的な御協力をお願いいたします。社会の環境が大きく変化中、長年にわたり、子供たちの健やかな成長を願い、多様な活動を展開してこられた日本PTA全国協議会及びに各学校のPTAに寄せられる期待は、誠に大きいものがあります。

PTA活動に携わる皆様方は、我が子だけでなく、全ての子供たちのためという気持ちを持って、仕事や家庭との両立など様々な工夫をしていただいていることと存じます。そのような皆様方の熱意や日頃の御尽力に感謝申し上げます。また、文部科学省としても皆様と手を携え、我が国の教育の一層の充実に努めてまいります。

いわれる貧困の連鎖によって子供たちの将来が閉ざされるようなことがあってはなりません。子供の貧困対策に関する大綱を踏まえ、幼児教育の段階的な無償化、スクールソーシャルワーカーの配置拡充、地域による学習支援の充実等に取り組んでまいります。土曜日の豊かな教育環境の実現に向けては、私をはじめ、文部科学省の職員が率先して学校や地域の教育活動に参加するよう努めています。また、地域や企業等の協力を得て、今年度は全国で約一万二千校で行われている土曜日の教育活動が、より多くの学校で展開されるよう取り組んでまいります。

また、御来賓の皆様方には、日本のPTAのより一層の充実のために、更なるご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。式辞とさせていただきます。また、地域の企業等の協力を得て、今年度は全国で約一万二千校で行われている土曜日の教育活動が、より多くの学校で展開されるよう取り組んでまいります。日本PTA全国協議会にも、土曜学習応援団として御参画いただいておりますが、社会全体で健全育成を図っていくため、今後とも、積極的な御協力をお願いいたします。社会の環境が大きく変化中、長年にわたり、子供たちの健やかな成長を願い、多様な活動を展開してこられた日本PTA全国協議会及びに各学校のPTAに寄せられる期待は、誠に大きいものがあります。

本紙は各校PTAに、「校長・教頭用」、「PTA会長・役員用」、「広報委員会用」、「事務局員用」を目安に配布しています。

2面へ続く

「1面の続き」
結びに、本式典の開催に御
尽力いただきました関係各位
に深く敬意を表します。こも
に、日本PTA全国協議会の

受賞者代表謝辞

子どもたちから与えられた元気 PTAの仲間から与えられた勇気

謝辞

受賞者代表

佐藤 辰夫 氏



只今は、身に余る、素晴らしい表彰状をいただき、ありがとうございました。受賞者一同感謝の気持ちでいっぱい
です。

受賞者を代表いたしまして、
謝辞を申し上げます。

私たちはPTA活動を通して、子どもたちの無限の可能性と、未来へ進む生きる力を共有するという素晴らしい経験をさせていただきました。わが子は家族の宝であり、地域の子どもは社会の宝です。この子どもたちに身近で接し、育む活動に参加できたことに喜びを感じています。

私事になりますが、千年に一度、未曾有の大災害と言われた東日本大震災、その後の東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能被害は、福島県では今も出口の見えない

益々の御発展と、本日お集まりの皆様方の御健勝を祈念し、お祝いの言葉といたします。
平成二十六年十一月十九日
文部科学大臣 下村博文

い、厳しい状況が続いていま
す。

発災当時は行政も含め、混乱する多くの人達の中では、一向に前に進むこともできず、未来が想像できませんでした。子どもたちの命をどうすれば守れるのか。学力は維持できるのかなど、多くの問題に直面し悩み、苦しみました。その時に私が考えたことは日本PTAに頼ることでした。日本PTAなら全国の仲間、関係機関に私たちの声を届けてくれるに違いないと、SOSを発信しました。

次々と被災地支援に訪れる協議会会長の皆さまを始め、全国からは大勢の仲間が駆けつけてくれました。そして沢山の支援、励ましをいただき、一人では出来なかったことがPTAの力で実現できました。その後は、子どもたちの「生きる権利」「育つ権利」「学ぶ権利」この3つの権利を私たち大人の義務に置き換え、この3本の柱に沿ったPTA活動を進めてきました。

私たち大人に元気を与えてくれたのは子どもたちです。勇気を与えてくれたのはPTAです。そのお陰で私たちはここまで来ることが出来まし



第36回全国小・中学校PTA広報紙コンクール受賞団体

た。あらためて感謝申し上げます。
さてPTAは、様々な職業多くの知恵や経験、そして思いを持った人たちの集まりです。エキスパートの集団です。この素晴らしい組織、PTAを通して子どもたちの未来に一つでも多くの希望の光を届けることができれば、親として一人の大人としてこの上ない喜びであると思っていま

押し付け合つたのではなく、義務と役割を果たして行くことが必要であると考えます。全ては、愛してやまない子どものためです。
これまで共に活動をしてきた仲間、知り合った全国の仲間、何より一番近くで協力をしてくれた家族に心から感謝を申し上げますと共に、公益社団法人日本PTA全国協議会の更なる前進と、全国のPTAの皆さまのご活躍を、祈念申し上げます。本日誠にありがとうございました。

優良PTAの活動紹介

日本PTA全国協議会会長表彰 個人受賞

西村 澄子 氏



振り返れば15年前に長女の小学校入学から、毎年、役を受け続け、そのお陰で、地元はもろんのこと、福岡県内、そして日本中に知り合いを頂きました。

初めはためらいながら受けた役でしたが、いつしか「私でよければお受けします。」と言える気持ちになれた私に変わっていました。
そんな前向きな気持ちになっ
て行けたのは、活動し参加すること
で新しい出会いがあるから
でした。新しい人を知り、知らない
事を学び、子どもや家族が
沢山の支えの中にある事をあら
ためて気づきました。また、一
つのきっかけを頂いた事で、人
が集い楽しさが生まれ、充実を
感じる事を子育てをしながら経

験させて頂きました。確かにた
くさんの経験の中には、悩みや
不安がありました。その一つ
一つは、「何も無駄ではない」
という事を、今は経験のもとに
子どもたちに伝える力も頂きま
した。学校と地域とそして子ど
も達の近くにいるPTAで活動
させて頂いた幸せを再度かみし
め、一節目をむかえ、ただただ
感謝しております。
ありがとうございました。
前福岡県PTA連合会会長
西村 澄子

日本PTA全国協議会会長表彰 団体受賞

綾町立綾中学校PTA

綾中学校PTAでは長期休業中を除いて、月2回、綾土曜学校(綾AYTA、土曜日Saturday School)の頭文字をとりASSS)を行っています。
対象となる子どもたちは、勉強をしたい、わからないところがある、家では勉強ができない、部活動前に課題を終わらせたいなどさまざまです。サポートしてくださるのは、綾中学校講師の先生、先生の卵の宮崎大学教育文化学部の学生、地域の方々、PTA役員、ASS事業部の皆さんです。保護者や学生が解答



子どもたちの「わかった」「できた」「終わった」と何かひとつでも気づき、達成感をもっても

PTA会長 山田由美子

文部科学大臣表彰受賞

荒川区立原中学校PTA



東京の下町 郷愁ある都電の行き交う街。隅田川の流れるほとりにある学校です。
荒川区立原中学校は、尾竹橋中学校と第六中学校の統合校としてスタートした学校です。
歴代の方々や地域の方々に見守られ、支えられ、そして今年11月15日に創立20周年を迎えることができ、式典・祝賀会を開催いたしました。
伝統を継承する活動に「あいさつ運動」「夜間パトロール」また、地区委員会活動の「地域のお祭り」など、様々な活動に

「チーム原中」を合い言葉にPTA活動をしています。
また、近年は国際交流として、

前PTA会長 池田 由美

各国の方々子どもたちが交流を深める活動をしています。
「子育ては親育ち」PTAの活動スローガンとして掲げ、地域から愛される素晴らしい学校に、また、伝統を継承し、今後さらなる発展ができる活動をしていきます。

第62回日本PTA全国研究大会長崎大会



「集い 語らい 学びあい
くきてみんね さるいてみ
んね よかとこばい」
をスローガンとしました。
全国大会を開催するにあたって、どのようなコンセプトを

8月22日・23日の「第62回日本PTA全国研究大会長崎大会」は盛会の内に幕を閉じました。ここで本大会を総括して振り返ってみます。本大会は8000名の申し込み予定に対して、約9200名の参加申し込みを頂戴し実行委員会一同、驚きと喜びを同時に得る事となりました。
次の文言は長崎大会の大会趣旨の一部抜粋です。
「親子のふれあいを大切に、困難にくじけない強さや人を思いやる優しさを持ち、粘り強く努力する子どもを育成することが私たちPTAの使命のひとつともいえます。異国情緒豊かな平和都市長崎において全国から多くの皆様が集い、交流を深め、相互に研修し実践力を高めることにより子どもと保護者の関わる課題の解決と今後の方策を見出し「いっしょに」この趣旨をもとに

持って大会に臨むかは大変重要なポイントになります。子どもたちを中心に据え、子どもや保護者を取り巻く様々な環境などを鑑み、大会を行う意義を明確にすることから準備は始まりました。
また一方で、全国大会を開催するにあたり、長崎県の会員規模、都市インフラでできることとして、これまでの大会と同様の事にできること、できないことがありました。
長崎県のPTA会員は約9万8000人、宿泊・交通・会場規模など過去の大会と比較しても不十分なものが多くという状況がその背景にあります。

しかしそうであったからこそ逆に長崎県PTA会員及び、関係者の思いは熱く、何となくでも成功させたいと！と団結していく事になりました。
長崎県規模でもできる、コンパクトでありながら質の高い大会を目指そうと。

その意味では長崎大会はチャレンジの大会でもありました。分科会を平日開催したり、会費を例年の5000円から4500円としたこと、物理的にやむを得ず全体会の会場が複数に分散せざるを得なかったことなどございました。
十分に吟味し周到な対策を打ったところではありましたが、想定外の問題は起こりました。分科会当日、西日本、北部九州地区の集中豪雨による交通網の混乱により、長崎入りできず止む無く参加を取りやめとなった協議会様・会員様も多くいらっしゃいました。

このことが直接的な理由とするかは定かではありませんが、申し込み実数と実際の参加実数には1000名以上の開きが出ました。
様々なハプニングは大会当日まで起こり、困難を極めた時期もございましたが、長崎大会実行委員会一同、この大会を成功させたいという思いは準備期間から変わることなく完遂することができたと思っております。
又、会場頂いた皆様に対して配慮が行き届かない事や、宿泊・交通・施設面で不自由さをお感じになられた点につきましては私ども実行委員会の準備不足があったと思われる反省とお詫びを申し上げる次第でございます。

結びに大会を通じて、つながりと学びは確実に得られたものと手ごたえを感じております。
この思いを参加された皆様を持ち帰って頂き実践に移し、子どもたちの健全育成の一助となり更に会員の皆様同士が繋がりを深めて頂くことを願っております。

次年度開催地の札幌大会の成功を心より祈念申し上げます。ありがとうございました。
実行委員長 東川勝哉

第1分科会 【組織運営】

活発な組織作りについて学びあおう

PTA活動の原点に帰り、「PTAとは何か」「活動活性化のヒント」「組織作りへの助言」について、参加者が互いに語り合い、情報や知恵を分かち合うことから、単位PTA活性化に向けて探していくことで、特効薬ではない活性化のヒントがあることを見出します。そのために、参加者全員が互いの実践を分かち合い、自ら関わることを学びました



第2分科会 【家庭教育】

学び合おう 高めよう 子どもと向き合う親力

「親力とは何か」「親力を身につけるために何をすべきか」長崎で実践されている、保護者同士が交流を図り、連携して楽しみながら、他者の考えを聞きながら、学ぶことができる、参画型学習プラン「ながさきファミリープログラム」を用いて討議し、この時代に合った子どもと向き合う親力を一緒に学びました。



第3分科会 【学校教育】

学校と地域でつくる学びの地域コミュニティ

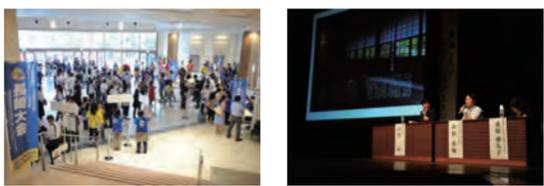
学校支援会議(学校支援地域本部事業)に取り組んでいる佐世保市の小学校の実践発表をとおして、家庭・学校・地域が一体となって地域ぐるみで子育てをしていく大切さや、どうすれば保護者や地域の人々が学校や子どもたちの教育に関心をもち、積極的に参加できるようになるのか、各地域の現状を出し合いながら話し合いを進めました。



第4分科会 【広報活動】

見たい 知りたい 参加したい つなぐ広報考えたい

広報活動=広報部による広報紙発行にとどまらず、幅広い視点でのPRの手法を考えていきたい。
PTAが行う事業の多くに対し、参加者を増やすためには他に手法はないか。
執行部を中心とした会員が活動(事業)の楽しさや良さを広く発信し、PRするためには何が必要か議論されました。



第5分科会 【地域連携】

災害を乗り越えて ~地域と共に未来につなぐPTA活動~

23年前の雲仙普賢岳の噴火による被災から今日まで、全国からの心温まる支援や励まし、またPTA会員、地域の方々の協力と努力のおかげで南島原市立大野木小学校は、確実に復興してきました。
しかし、現在通学している子どもたちは、被災経験がなく、災害時や仮設校舎の時代を知りません。われわれ経験者が語り継がなければ被災校であっても、災害のことが忘れ去られます。
地域連携を通じて、命の大切さや忍耐強く生きる心、相手を思いやり、支えあう気持ちを育てていくために、これからの未来に向けて、PTAのあるべき姿とは何かを探し求めていかなければいけないと思います。



第6分科会 【人権・平和教育】

わたしが変われば あなたも変わる

あなたが大事 わたしも大事 いのちを支える育ちあいいじめやストレス、さらにそれらを要因とする自死を防ぐべく、平和と命の尊さを想い、子どもと大人の自己肯定感を育み、生きる力を養うために、今日からできることを考えました。



第7分科会 【国際理解】

見つけよう! 私らしさを 世界から育てよう! つながる力を わが家から

他の国や地域の子育てや教育の考え方をすることにより、違いを理解しながら自分らしさ(自国の良さ)を発見します。親子の心の共有や、コミュニケーション能力の向上のためには、日常の家族との団らんが大切であることに気付いていく。



第8分科会 【健康安全】

タフな子どもを育てよう! ~心豊かでたくましい子どもを育てるために~

親は子どもの世話を焼きたがるものです。それは、心情として当然のことではあるのですが、「子どものため」と言いながら、本来子どもが成長の過程で身に付けなければいけない様々なことの阻害になってはいないでしょうか。
「タフな子ども」とは何か、子どもに求める「真の強さ」とは何なのかを精神・身体両面から考え、希望に満ち溢れ、無限の可能性を秘めた子どもたちの健康な「心」、「身体」、「安全な社会」をつくるために、私たちが今しなければいけないことを見つけ出したいと思えます。



特別第1分科会 【日本PTA担当】

子どもたちの育ちを阻害するもの

第1部講演では虐待の事例報告を行い、その後、虐待の発見についての理解を深めました。
第2部対談では、古野陽一氏と角野良氏に、子どもを取り巻くメディアの現状と、長崎県におけるメディア対策、特にメディア安全指導員養成の取組について、対談形式で語っていただき、メディア対策の重要性を認識し、先進県における取組から今後のメディア対策のあり方を検討しました



特別第2分科会 【文部科学省担当】

絆の力が生み出す日本の明るい未来

・災害からの学び、気づき、そして、災害への備えをいかに子どもたちとともに学ぶか。
・伝統や事例に学ぶ復興とその原動力とは。
・長期的支援のために私たちは何をすべきか。
上記につきまして、熱い議論が行われました。



日本PTAブロック研究大会

未来へつなぐメッセージをこめて

第61回日本PTA北海道ブロック研究大会 胆振西部・登別大会

○期日 10月11日・12日
○場所 登別市 日本工学院北海道専門学校
他7会場

「温かい心で共に感じ 共に育ち 共に生きるPTA活動を目指して」の大会スローガンのもと、第61回日本PTA北海道ブロック研究大会胆振西部・登別大会が、約1200名の会員を迎え、温暖な気候で温泉をはじめとする観光や豊かな海・大地が育む各種特産物を有する北海道らしさに溢れた胆振西部・登別市で盛大に開催されました。

胆振西部・登別大会



仲 律子氏



1日目は市内の小中学校など7会場、5つの分科会と2

つの特別分科会が開催され、2日目は、日本工学院北海道専門学校で、全体会、記念講演、閉会行事が行われました。第1日目の各分科会では、それぞれのテーマに基づき、各単Pや各地区の特色あるPTA活動の取り組みの発表があり、子どもが健やかに育つ

環境づくり、食育について、PTAとしてどう行動していくのか、親子の絆や学校との連携、さらには地域のつながりの大切さなど、様々な視点から熱心な研究協議が行われました。

また、特別第一分科会「中学生討論会」では、「地域と私たち」今、自分たちでできること」をテーマに6校12名の中学生による討論が行われ、特別第二分科会「防災とPTA」では、家庭における防災教育のあり方、災害時における子供たちの活動とPTA活動の係わりについて研究協議が行われました。

2日目の講演会では、鈴鹿国際大学国際人文学部教授

の仲律子氏による「生命(いのち)のメッセージ」かけがえのない存在(ひと)を守るために」と題しての講演があり、犯罪被害者支援をとおり感じて、精一杯生きるために、また深く人を愛す

るために《死》と共に生きることはとても大切なことというお話をいただきました。最後に、来年度の札幌大会での再会を願いながら大会終了となりました。

第46回日本PTA東北ブロック研究大会 盛岡大会

○期日 9月6日・7日
○場所 盛岡市 岩手県民会館大ホール
他6会場



バイマーヤンジン氏

第46回日本PTA東北ブロック研究大会は9月6日7日、岩手県盛岡市で「希望郷いわてで語り合おう！未来を創造する子どもたちのゆめ」を

「こころ」を、そして「つながり」をの大会主題のもと、2000名余が参加し開かれた。

大会第1日は、東北の復興と発展を支える明るくたくましい子どもの育成を研究内容とした「震災復興教育」と、支援の必要な子どもたちの姿を通して、個性や発達の違いを認め合い、支え合つ心を育む家庭教育のあり方を考える「家庭教育セミナー」の2つ

記念講演はチベット出身の音楽家バイマーヤンジン氏が「子どもの心と家族の愛」と題し、厳しい気候、風土の中で家族と睡ましく過した日々や、学生時代のこと、来日後

の特別課題分科会を含め7分科会で協議が行われた。第2日目は開会行事、大会宣言文の採択、感謝状・表彰の贈呈、記念講演を内容とした全体会が行われ、アトラクションとして盛岡市内の特別支援学校の生徒たちの合同表現活動と和太鼓演奏が披露された。

「ココロとカラダに優しい音楽」をテーマに、会場全体がとて



の印象、家族や故郷への思いを時折、ユーモアを交えたり、さわやかな笑顔を絶やすことなく語りかけられた。フィナーレでは東日本大震災の復興支援ソング「花は咲く」を講師と会場参加者で大合唱し、大会を終了した。

ブロック研究大会 (一覧)

第61回日本PTA北海道ブロック研究大会 胆振西部・登別大会	開催日時 10月11・12日	記念講演 仲 律子
スローガン	「温かい心で共に感じ 共に育ち 共に生きるPTA活動を目指して」	
第46回日本PTA東北ブロック研究大会 盛岡大会	開催日時 10月11・12日	記念講演 バイマーヤンジン
スローガン	「希望郷いわてで語り合おう！未来を創造する子どもたちの“ゆめ”を“こころ”を、そして“つながり”を」	
第46回日本PTA関東ブロック研究大会 さいたま市大会	開催日時 10月25・26日	記念講演 沢田知可子
スローガン	「ささえ合い いのちの尊び たくましく まごころつなく 子どもたちに～五つのことだま 子は親の鏡 生き抜く力を子どもたちに～」	
第61回日本PTA東海北陸ブロック研究大会 岐阜大会 in 下呂	開催日時 10月24・25日	記念講演 澤口俊之
スローガン	「元気・笑顔・レインボー・大きな夢をこどもたちに」	
第40回日本PTA近畿ブロック研究大会 大阪市大会	開催日時 11月4日	記念講演 柳本晶一
スローガン	「こころから こころへ」One for all All of one	
第44回日本PTA中国ブロック研究大会 岡山県玉野大会	開催日時 11月8日	記念講演 菊地幸夫
スローガン	「共に育てよう 夢と希望とやさしい心 子どもたちの未来のために」	
第43回日本PTA四国ブロック研究大会 愛媛大会	開催日時 11月16日	記念講演 間 寛平
スローガン	愛の手で未来を描くPTA	

第46回日本PTA関東ブロック研究大会 さいたま市大会

○期日 10月25日・26日
○場所 さいたま市文化センター
他8会場

関東ブロック14協議会から、同じ志を持ち日々活動をしている仲間 約2000名がさいたまの地に集い、「第46回日本PTA関東ブロック研究大会さいたま市大会」は1日目8つの分科会からスタートした。大会スローガンにちりばめられた5つの「キーワード(こ

とだま)」を基に考えられた研究テーマに対し、各協議会代表の熱のこもった発表や選りすぐりの講師の方々の力のこもった講演で、各会場共におおいに盛り上がり充実した分科会となった。2日目の全体会は、分科会報告・大会宣言文採択の後、記念講演として、地元



沢田知可子氏

さいたま市出身の歌手沢田知可子さんの「ココロとカラダに優しい音楽」と題した歌セラピーコンサートが開催された。知可子さんの「初恋をした頃や、少年少女の頃にもどり時間旅行



を楽しまましよう！という言葉に、会場全体がとて「うきうき」した空気に包まれていた。時間旅行が進み、いのちの大切さについての話があり、生きる力を与えるメッセージソング

「gift」が歌われた時は、情感のこもった歌声に会場全体涙で包まれた。また、ご自身がさいたま市内の中学校在学時に、お父様がPTA会長を務めており、お父様がPTAの用事などで学校に来ているときは「なんとかなるれしかつた」とのエピソードに、皆大きくうなずいていた。記念講演の後の閉会式では、大会旗がさいたま市PTA協議会 鶴沢会長から、来年度の開催地である横浜市PTA連絡協議会 森川会長に手渡され、さいたま市大会の幕が閉じられた。

第23回日本PTA東京ブロック研究大会

日時 平成27年 2月15日(日) 13時30分～16時
場所 新宿区立新宿中学校 けやきルーム
内容 「特別な支援が必要な子ども達とともに」(課題)
講師 明星大学教育学部教育課教授 (特別支援教育) 保健学博士 星山麻木 先生

第40回日本PTA近畿ブロック研究大会 大阪市大会

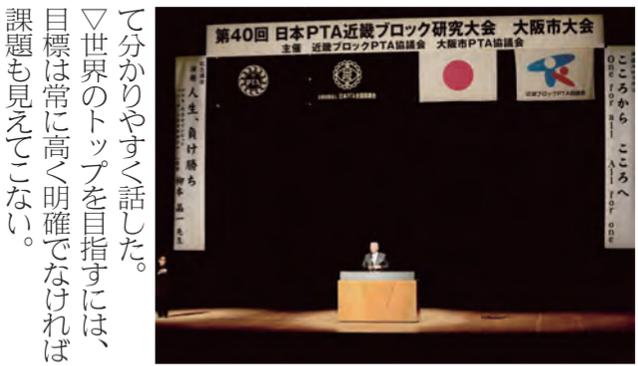
○期日 11月4日
○場所 大阪国際会議場 グランキューブ大阪



柳本晶一氏

第40回日本PTA近畿ブロック研究大会・大阪市大会が11月4日(火)、大阪国際会議場(グランキューブ大阪)で、近畿各府県から約3000人の会員が参加して開催された。大会スローガンは「『ここからこころへ』(One for a All for one)」。

午前中は、6分科会に分かれて、各地のPTA活動の実践報告が行われ、交流を深めた。中でも、特別分科会は1000人を超える参加者が、オリンピックのメダリストたちのパネルディスカッションに熱心に耳を傾け、これからの家庭教育について考えた。



記念講演では、アテネ・北京オリンピック バレーボール全日本女子チーム監督で、大阪市教育委員会顧問の柳本晶一さんが「人生、負け勝ち」と題して、全日本女子チームを世界レベルまで押し上げた苦闘話を、当時の選手を引き合いに笑いを交え



菊地幸夫氏

▽目標があれば挫折もプラスになり、ポジティブになれる。▽十人十色の選手育成と子育ては同じ。必ず伸びる時はある。そのため、個性や個の違いを見極め、伸びた瞬間を見逃さず褒めることで自信を持たせることが大切。



バイマーヤンジン氏

▽「手を離しても目を離すな!」目を離しても心を離すな!」が子育ての極意。最後に、柳本さんは「スポーツを通じて技術だけでなく、人間性を磨いてこそ人生に生かせる。子どもたちには人生の金メダルを目指してほしい」と話を結んだ。

▽世界へのトップを目指すには、目標は常に高く明確でなければ課題も見えてこない。



澤口俊之氏

初日は市内6会場で分科会が開催され、東海北陸の6県1市から2610名が参加し、12のPTAによる実践研究発



「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

起き、和やかに聞きながら、子どもを育てて何をしてあげたいのか真剣に聞き入る姿が多くありました。最後に、今井大会実行委員長がお礼の言葉を述べ、大会

▽「手を離しても目を離すな!」目を離しても心を離すな!」が子育ての極意。

午前中の実践発表は「地域と学校との情報共有・携帯メール連絡ツール」体験の風をおこそう・早寝早起き朝ごはんの県内実態調査報告「スマートフォンでの夜間利用制限」をテーマに展開され、特に岡山県P連は平成18年度に「子どもの生活状況実態調査」を実施しましたが、更に今回再調査をし「食事、睡眠などの乱れを個々の家庭や子どもの



歌手バイマーヤンジン氏による音楽とトーク「輝いて生きる夢は実現するためにある」で軽快なトークとチベットの民謡等を披露し、素晴らしい透き通った歌声に参加者は大きな感動を受け会場は鳴り止まない拍手にまつまれました。

「元氣・笑顔・レインボー」大きな夢を子どもたちに「を大会スローガンとした、第70回日本PTA東海北陸ブロック研究大会岐阜大会が、10月24日・25日の2日間、晴天の中、紅葉が美しくなり始めた下呂市で開催されました。

翌日の下呂交流館(ホトト)アリーナで行われた全体会の式典は、中村大会長が、26年版子ども・若者白書を引用して「家族関係、学校生活、職場生活が充実し、満足している若者ほど自己肯定感

「高い」として、保護者自身が「自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境づくり」が、学校については「教師が子どもと十分に向き合い指導ができるような環境作り」が重要である。「子どもが他者と関わる際の基礎や、他人と良い関係を築いていける能力の土台は親子関係にある」と述べた挨拶で始まりまし

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

第70回日本PTA東海北陸ブロック研究大会 岐阜大会 in 下呂

○期日 10月24・25日
○場所 下呂交流館 温アリーナ 他6会場

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが

第43回日本PTA四国ブロック研究大会 愛媛大会

○期日 11月16日
○場所 愛媛県武道館

「これからの社会を生き抜くために伸ばすべき能力とは?」「子どもの脳をいかに育むか」などをテーマに、「幼児教育と脳について、学力や社会教育と脳の関係」などを、親の在り方を含めて講演いただいた。初めにHQという言葉が聞かれる人も多かったようですが、将来自立した子どもたちの育成を願う親の気持ちは誰もが同じで、時々笑いが



間 寛平氏

を子どもたちに示すことの大切さを軽妙な語り口で伝えていただけですばらしい記念講演でした。

閉会行事では、参加者の方々へ東日本大震災で大切な親や家族を亡くした子どもたち等の「心のきずな61教育支援基金」と平成26年8月広島豪雨土砂災害の募金活動へのご支援、ご協力をお願いしました。多くのの方々のご支援、ご協力により無事研究大会を終えることができましたこと、改めてお礼申し上げます。

国内研修事業

in 渡嘉敷島

平成27年3月刊行予定書籍

平成26年度PTA実践事例ガイド(通巻28)

近年、価値観の多様化や情
報通信技術の発達によって、
子どもたちを取り巻く環境は
大きく変化してきております。



平成26年度PTA実践事例ガイド
(制作中のため実際のものとは異なります)

このよう
な時代であ
れば、子ど
もたちの健
やかな成長
のためには
家庭、学校
及び地域社
会の連携が
何より求め
られます。

ています。

こうした状況は、教育改革のほかに、生活環境の不断の改善が求められており、子どもと身近に接しているPTAへの期待は大きいものがあります。

このような時代の要請に応じたPTA活動の見直しの一助とするため、全国からPTA活動の実践事例を集め、実践事例ガイドとして事例集を作成することとなりました。隔年で作成していた「実践

教育に関する保護者の意識調査

事例集」からデザインを一新し、全頁フルカラー・A4判での発行を予定しています。



(上記は25年度作成のものです)

今回の調査内容は、

日本PTA全国協議会は、小学校及び中学校におけるPTA活動を通して、我が国に

保護者の意識の経年変化を推し量る項目を基本に、児童・生徒を取り巻く社会環境を踏まえた時事性の高い項目として、学校教育・家庭教育・家庭と学校のコミュニケーションの

子どもとメディアに関する意識調査

私たちが取り巻く環境は、グローバル化・国際化の進行、少子高齢化と核家族の定着、産業構造の変革に伴う労働形態の変化などで今後の社会の在り様が予測し難くなっています。

もちろん、子どもたちを取り巻く社会・生活環境についても「自由に遊べる場所の減少」「テレビ放送の多チャンネル化」「ゲーム機器や携帯端末の娯楽性の多様化」「日進月歩の情報通信技術」などで大きく変化し続け「子どもたちが地域社会の中で心豊かに健やかに育まれる環境づくり」のいっそう充実した取り組みが最重要課題となっ

各分野において、保護者の方がどのように考え、どのようなことを期待し、どのようなことを行っているか等について把握するものとなっております。

ているといっても過言ではありません。

このような中、「マスメディアの多様化、情報通信技術が進展する社会に生きる子どもとのコミュニケーションの在り様、および子どもたちの在り様、および子どもたちの在り様の変化について考える上で資料に供する」ことを目的として、本年度も「子どもへの影響を与える有害情報問題の取り組み 子どもとメディアに関する意識調査」を実施しました。

12回目となる本年度の調査では、今まで11回の調査項目を継承しつつ、子どもたちの生活の中で友だちとのコミュニケーションや情報の収集・発信受信に欠かすことができない「テレビ等の視聴状況と影響」「携帯端末の活用について」と「ゲームソフトの遊び方」「有害図書としてのマンガ・コミック、雑誌」、それに昨今の革新的な携帯端末等の通信技術の発達にもなっている、ICTの知識が十分に備わっていない中でSNS(ソーシャルネットワークサービス)を使ったために事件に巻き込まれるケースや、友だち同士のネットトラブルなどから、ネットが「いじめ」の温床にもなっている事なども考慮にいれ調査項目を一部改訂いたしました。

3年前まで実施していた「日中友好交流事業」にかわって、昨年度から、異文化などの国際理解への視野を広めるための「国内研修事業」を行っています。今年度は、美しく雄大な自然に囲まれた沖縄県の渡嘉敷島を舞台に研修を行います。渡嘉敷島の方々の交流を通じて、多様な文化、平和について理解を深め、多くの人と共に生きていくための資質や能力を育んだり、渡嘉敷島の発展、自然を保護するために活動する人々から学ぶことから、地域活動の重要性と環境保護を考える機会にしたいと思っております。



緑と青空につつまれて体験型学習



海洋研修場 渡嘉志久ビーチ

国立沖縄青少年交流の家での集団宿泊活動を通じて、全国から集まる中学生が相互に交流し、友情を深めていただきたく、現在、プログラムの

最終調整を行っています。先に、担当役員らが現地を訪れ、関係機関への協力をお願いしてきましたが、現地を視察しての第一印象は、美しい自然・文化・産業、そして島の人のちずべてにおいて、離島でしか体験・感じる事ができない、まさに異文化を理解するには渡嘉敷島は最高のロケ

国際社会で活躍できる時代を担う人材の育成を目指して

研修に参加する全国の中学生がこの事業を経験することで、将来日本・世界で活躍する、心豊かな大人に育って欲しいと願っています。

第36回優秀広報紙集

全国小・中学校PTA広報紙コンクール
～読みやすく想いが伝わる広報紙を目指して～

第36回全国小中学校PTAコンクールの入賞作品を紹介した「優秀広報紙集」が完成しました。日頃のPTA活動を反映した素晴らしい広報誌の数々が紹介されています。

全国から5449校の応募があり、その中から各地方協議会での第1次審査を経た578校が日本PTAに推薦されました。さらに第2次、第3次、最終審査を経た、小学校22校、中学校21校、計43校の作品がこの「優秀広報紙集」に掲載されています。

各受賞作品の審査総評や「ワンランクアップの紙面の作り方」など、伝達情報の媒体としてのみでなく連携の絆としての役割を担う広報紙作りには欠かせない実践的な手引きとなっています。ぜひ、学校と家庭、地域を結ぶ機関紙作りにお役立て下さい。

◆購入方法

はがきまたはファックスで、住所、氏名、希望部数を明記の上、下記へお申込みください。
定価 1715円+税(1850円※消費税率8%の場合)
送料 別途

公益社団法人 日本PTA全国協議会
〒107-0052 東京都港区赤坂 7-5-38
FAX 03-55445-7152
(お支払いは同封の振替用紙をお願いします)

日P推薦映画のご紹介

特別推薦

アマゾン大冒険

世界最大のジャングルを探検しよう！



世界最大面積を誇る熱帯雨林・アマゾン。南米アマゾン川流域に大きく広がり、その

広大な面積は地球上の熱帯雨林の30%を占め、生物種の約10%以上が存在していると言われている。現在でも新種が発見され続けているアマゾン奥地で、フランス人監督ティエリー・ラコペールが約2年の歳月を費やし撮影に挑んだアドベンチャー大作。アマゾンの壮大な景色やダイナミックな映像美だけでなく、絶滅危惧種も含め貴重な生き物が数多く登場。更に生き物の生態を熟知しながら捉えた学術的にも貴重な映像に、子どもたちだけでなく大人でさえも、今までに見

たことのない映像に心を躍らせる作品となっている。

《ストーリー》

人間に飼われていた主人公・フサオマキザルの子猿「サイ」は突然アマゾンに迷い込み、壮大な自然の中で様々な出来事を体験する。

食べ物を探し出し、敵に追いかけられ、恐怖を覚え、仲間と出会い、生きていく術を学んでいく。この熱帯雨林に存在する生き物と自然の要素だけを切り取った独創的な物語を見ているうちに、観客は「サイ」に共感し、喜びや恐怖を分かち合いながら、アマゾンの世界にどっぷりとつかることになるだろう。

制作◆ピロバ・フィルムズ(フランス)
配給◆クロックワークス

特別推薦

山本慈昭 望郷の鐘

満蒙開拓団の落日

「中国残留孤児の父」と言われた山本慈昭。自らも満州で過酷な体験をしながら、生涯を残留孤児たちの肉親探しにささげた感動の物語。

《ストーリー》

山本慈昭は長野県にある長岳寺の住職であり、国民学校の先生でもあった。昭和20年

5月、敗戦間近に説得され、1年だけという約束で満州へ渡る。

8月9日に、不可侵条約を破りソ連軍が一方的に攻めてくると、敗戦もわからぬまま女子どもを抱えて逃げ廻る。列車もなく、橋は壊され、山の中を歩き、食料もなく死の旅であった。或る日、慈昭達一行はロシア兵に捕まり、男性はシベリアへ連行される。極寒の中労働を強いられたが、奇跡的に1年半後に日本に帰国することができた。



帰国後、ダム建設のために強制連行された中国人の事を知り、遺骨を中国へ返す運動に力をそそぐ。そんな中、慈昭の元に一通の手紙が届く。戦争で親と離れたおなれになった子どもたちが両親と再会したい

県P自慢

鹿児島県 シリーズ76

地域とともにあるPTA

小・中・高で構成された全国唯一の連合会

鹿児島県PTA連合会は、全国で唯一小・中・高校及び特別支援学校で組織された連合体です。また、南北600キロに及ぶ本県は、離島をはじめ各地域に多彩な風土と文化があります。本連合会では、こうした特色を生かして様々な取組を行っています。

関係機関との連携

その一つが関係機関・団体との連携で、校長協会、退職校長会、県教育委員会と毎年意見交換会を行っています。校長協会と退職校長会は、本連合会と同様に小・中・高・特で組織されています。意見交換会ではこうした特色を生かして、今日的な課題について情報の共有はもちろん、小学校から高校までの12年間を見通し、それぞれの段階で行うべきこと等についても意見交換を行っています。

研究委嘱公開

県P大会の開催 会員の資質向上は大切な柱です。県教委と共に主催している研究委嘱公開は、昭和25年の本連合会発足と同時に始まりました。県内7つのブロックごとに2年間の研究を行い、その成果を発表しています。これに対し、県P大会はすべての校種の会員が一堂に会し、その時々々の課題について議論



県P大会(奄美大会)

また、多くの小学校では、校区内のすべての住民がPTA会員となって子どもたちの成長を見守ってくれています。



県教委との意見交換会

子どもたちのために、これからも一丸となって取り組んでまいります。

つきが強く、学校は地域の中心です。運動会などの学校行事は地域ぐるみで開催され、地域のお年寄りが選手として当たり前に出場しています。

長を見守ってくれています。地域の伝統や文化は、こうした交流をとおして子どもたちを受け継がれています。本連合会では、「子どもを守り育てる最終責任は親にある」という認識のもと、心豊かたたくましい子どもを育むことを目指して活動しています。地域も広く校種も多いゆえの負担もありますが、それ以上の成果が上がっていると自負しています。

楽しむことを第一に

角兵衛獅子の舞う里で

◇はじめに

『梨の園生の花の香を：』で始まる校歌。新潟市

Column

学校の窓から

シリーズ⑤4

立月瀧中学校は新潟市南区にあります。水稲と梨を主とする果樹園が学校の周りに広がり、大変自然豊かな土地柄です。美空ひばりが幼い頃に出演した映画「鞍馬天狗角兵衛獅子」の少年杉作で知られる角兵衛獅子はこの地域の伝統芸能です。現在、県無形民俗文化財に指定され、有志がお祭りに獅子舞を披露し、立派に郷土芸能を受

け継いでいます。本校は全校88名の小規模校で、生徒は小学校からずっと同じクラスで生活しています。そのため、生徒や保護者同士もよく知っています。素直で温かい人間関係が醸成されています。また、地域の結び付きが強く、PTA活動にも大変協力的です。

◇PTA活動

ここでは、ユニークな活動のみを紹介いたします。中学生と親が一緒になって楽しむレクリエーション。休日、中学生は全員、親は9割ほど集まり、スポーツやお菓

文化祭での「ペアレックスWithT合唱団」参加。保護者+教員の文字通りPTAが1ヶ月前から、週1回練習を重ね、「アナ雪」を熱唱しました。小さい規模だからこそできる、まとまりのある楽しい活動を目指して取り組んでいます。

また、多くの小学校では、校区内のすべての住民がPTA会員となって子どもたちの成長を見守ってくれています。

心のきずな61 教育支援基金

「水俣との交流事業」 ～福島復興を願って～

水俣交流事業の始まり

水俣交流は、東日本大震災が発生した年の、平成23年11月3日に熊本県PTA研究会大会のみならず、また大会に招かれ、水俣市を訪問したことから始まりました。

当時の福島県内の様子は、地震、津波被害はもちろん、東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能被害で毎日が不安の繰り返しでした。空気も水も食料も汚染され安心して使うことができなくなりました。支援物資も思うように届かず、子どもたちの県内外への避難流出も止まりませんでした。いくら将来を考えても、いつまでもに言う予想を立てることさえできませんでした。

東日本大震災と水俣

一致したのです。これから福島県が歩むであろう未来が見えました。同時に子どもたちの未来が見えなくなっていくことへの、とてつもない大きな不安、恐怖が体が震え、頭の中で整理することが出来なくなっていました。

午後の全体会では私の挨拶の場面がありました。分科会での話が福島県と重なり、ショックで事前に考えていた言葉が出てきませんでした。ゆっくり、言葉を運びながら今の福島県を伝えることしかできませんでした。話をしながら私の中では、いつになるかはわからないが、必ずや福島県の子どもたちを連れて水俣へ来なければならぬという、使命のようなものが生まれてきました。

そのような状況の中で、郡山市から水俣市へ嫁いだ一人のお母さんが声を上げました。水俣市立水俣第一中学校のPTA会員だったこのお母さんは、自分の故郷福島県をなんとかしたいという思いから避難所へ絵本を贈る活動をしていました。しかし一人での活動に限界を感じ、PTAの仲間にも声をかけ、そこからPTA会長への思いが伝わったのです。このPTA会長が熊本県PTA研究会大会のみならず、大会の実行委員長だったこともあり、当時の熊本県PTA連合会会長に福島県と交流を行いたいので窓口を作って欲しいと訴えました。

故郷を壊された同じ地域として、水俣の皆さんがこれまで費やされてきた知恵や経験を福島県に住む私たちが学び生かさなければならぬのです。この事業を、学校や行政が実施できれば良いのですが難しいようです。ならばPTAでやりましょうと、昨年12月に福島県内の中学生（1年、2年）代表40名とともに水俣市を初訪問しました。目的は、①福島県内の状況の共有 ②故郷福島県をどうしたいか ③そのためにどう行動するか。

熊本市PTA連会長が福島県PTA連会長である私に、「みなまた大会に来ませんか」と何度も声をかけてくれました。しかし、冒頭でも書いたように、福島県内の状況を考えると水俣まで行く余裕（心の余裕）もなく、断っていました。

その時に偶然目にした水俣市のHPに、当時の宮本市長さんの緊急アピールが掲載されていました。日本、世界に向けての発信文でした。この文章を見た時に心が動き、行くことを決めました。訪問したのは、私と事務局長の2人です。しかし心の中では、まだ、なぜ水俣なのかという迷いがありました。

最終目的は、福島復興、郷土愛です。生徒たちは現実を全身で受け止め、水俣交流の主旨を的確に捉えていました。自分たちの将来に向けての役割を確認していました。

私が考えていた以上の成果を出したのです。今年度は、水俣の生徒24名を迎え入れました。福島県の現状を見て感じたことを、率直に福島県に伝えて欲しいとの考えからです。昨年度とは異なり、更に内容の濃い事業となりました。水俣、福島の子供たちから、私たち大人にも大きなメッセージをいただきました。この事業は継続したいと考えています。

新水俣駅で県大会実行委員長が迎え入れてくれました。その夜のレセプションでは宮本市長さんをはじめ多くの方々と話をし、県外から見える福島県を知ることになりました。翌日の研究会大会では、人権教育をテーマにした「みなまた物語」という分科会に参加しました。この分科会が私と事務局長の心を大きく動かしたのです。水俣病資料館の館長の講話や水俣病語り部の方の話を聞くうちに、これまで数ヶ月しか経っていない福島県内の状況が、水俣市が迎った時間そのものと

一致したのです。これから福島県が歩むであろう未来が見えました。同時に子どもたちの未来が見えなくなっていくことへの、とてつもない大きな不安、恐怖が体が震え、頭の中で整理することが出来なくなっていました。

午後の全体会では私の挨拶の場面がありました。分科会での話が福島県と重なり、ショックで事前に考えていた言葉が出てきませんでした。ゆっくり、言葉を運びながら今の福島県を伝えることしかできませんでした。話をしながら私の中では、いつになるかはわからないが、必ずや福島県の子どもたちを連れて水俣へ来なければならぬという、使命のようなものが生まれてきました。



「水俣病の語り部」の講話



福島と水俣の中学生による班討議



福島駅にて対面 (左:福島県生徒 右:水俣市生徒)



被災した学校の見学 (校舎奥にあった体育館は取り壊された)



「モニタリングセンター」の見学



福島・水俣交流事業 参加生徒

「心のきずな61教育基金」の支援をいただいて実施した「水俣との交流事業」の概要等の中間報告をいたします。

○開催期日

平成26年10月31日～11月3日

○趣旨

震災、原発事故以降、福島の状態は厳しいものがあるが、水俣病の経験を後世に伝えるとともに、「環境学習都市」を目指している水俣市の中学生との研修・交流を通してこれからの福島を担う生徒の視野を広める事業として実施。第2回目となる今年度は、水俣市の生徒を本県に招き、本県の置かれた状況を見聞してもらい、研修・交流を通して、それぞれの立場を理解しあうとともに福島復興を担う生徒たちの育成に資する事業として実施。

○参加者等

- 福島県の生徒38名
- 水俣市の生徒24名
- 計62名(中学1・2年生)
- 福島県、水俣市の指導者計14名
- 福島県PTA連合会
- 水俣市PTA連絡協議会
- 計35名

○実施概要(主な活動)

- 班(6班編成)ごとの討議
- 水俣病の語り部の講話
- 放射線についての学習
- モニタリングセンターの見学(農産物の放射線量検査)
- 「アクアマリン」・「ららみゆう」の見学(震災後の復興状況)
- 被災地の見学
- 各班の発表、閉校式

あの日以来、多くの被害を被った福島県ですが、本会に対し、公益社団法人日本PTA全国協議会をはじめ、県内外から多くの義援金・支援金を頂き、厚く御礼申し上げます。さらに、本事業に対し、「心のきずな61教育支援基金」の助成を頂き実施できますこと、深く感謝いたしております。

福島県PTA連合会長 村上 和行

あの日以来、多くの被害を被った福島県ですが、本会に対し、公益社団法人日本PTA全国協議会をはじめ、県内外から多くの義援金・支援金を頂き、厚く御礼申し上げます。さらに、本事業に対し、「心のきずな61教育支援基金」の助成を頂き実施できますこと、深く感謝いたしております。

前述のように、実施いたしました。成果がすぐに出るような事業ではないかもしれませんが、昨年本事業に参加した1期生が、いろいろな場面で活躍しているという話を聞くたびにうれしく思います。

今後、地道に本事業を継続していく所存です。

「覚悟」「魂」「希望」、この三つの言葉は、水俣病と闘ってきた水俣病の語り部杉本さんが話された言葉です。今回の交流事業に参加して、ぼくが一番心に残った言葉でもあります。：ぼくたちができることをみんなで話し合い、福島と水俣の問題が終息を迎えるその日まで、福島は水俣へ、水俣は福島へ、エールの交換募金を各中学校で始めることに決めました。「エールの交換募金」を行うことで、今後の復興に役立たせたいという思いからです。：

ずとも歩けるお気に入りの場所を見つけました。この号の編集会議の時は未だ紅葉の時期には早くて、残念なことになりました。今はた

くさんの葉を落とし、枯葉を力サカサいわせながら歩けるようになり、それも又心踊る小径となつていきます。

私にとつての広報委員になった役割のお話でした。第346号はいかがでしたか？最後までご覧頂きありがとうございます。

2014年も残す所もあとわずか。1年の経つのがなんと早いことでしょうか。日Pの広報委員会に参加させて頂くようになって、事務局のある最寄駅の青山一丁目駅を使うようになったりしました。初め

着けない気がして途方に暮れてしまったものです。今は大丈夫、サクサクと歩いて行けます。都会の中にも暑さを忘れさせてくれる小径があり、日傘をささ

私にとつての広報委員になった役割のお話でした。第346号はいかがでしたか？最後までご覧頂きありがとうございます。

私にとつての広報委員になった役割のお話でした。第346号はいかがでしたか？最後までご覧頂きありがとうございます。



そよ風通信